

パルテノン西破風解釈試論

長田 年弘

問題提起

パルテノン西破風彫刻の主題(図1)については、パウサニアスによって、アテナとポセイドンのアッティカをめぐる争いが表されていたことが伝えられている^①。この地方神話について、最も詳細な記述を残すのはアポロドロスである。

大地の子で、人間と大蛇の混合せる身体を持っていたケクロプスはアッティカ初代の王であって、それ以前はアクターと呼ばれていたこの地を自分の名によってケクロピアーと名づけた。彼の時代に、人の言うところによれば、神々がおのおの自己に特有の崇拝をうけるべき都市を獲得することに決した。そこでポセイドンが先ずアッティカに来て、その三叉の戟を以てアクロポリスの中央をうち、今日エレクトーイと呼ばれている海を出現せしめた。彼の後でアテーナーが来て、ケクロプスを彼女の獲得の証人とし、今日パンドロセイオンにおいて示されているオリーブの木を植えた。この地の争奪が両神の間に生じた時に、ゼウスは二神を引き分けて、ある人々の言うように、ケクロプスとクラナオスでも、エリュシクトーンでもなく、十二神を〔アテーナーとポセイドンの〕審判役とした。そして彼らの裁きによって、ケクロプスがアテーナーが最初にオリーブの木を植えたことと証言したので、この地はアテーナーのものと判決された。そこでアテーナーは自分の名を取ってこの市をアテーナイと呼んだが、ポセイドンは大いに怒って、トリアシオンの野を水びたしにし、アッティカを海中に浸した。

物語の中で、特に大切な出来事は、アテナとポセイドンがそれぞれ、奇跡の印(martyria)となるオリーブの木と塩水をアクロポリス上に現出させたことであった。西破風中央には、争うアテナとポセイドンの間にオリーブの木が配されていたと考えられている^②。古代において、アクロポリス入り口を抜けて丘上に立ち、パルテノン神殿西破風を見る者は眼を左に転じればすぐに、女神が植えたと思われるオリーブの木をエレクトーイのそばに見ることができた^③。もう一つの印である塩水も、エレクトーイ内にあった。つまり、西破風は、見学者に対してアクロポリス上のmartyriaの由来を解説する役割も果たしていた。

この神話に言及する古文獻は、数が多く、記述の内容も多岐にわたり互いに食い違う点が多い^④。そのため、破風がどのような情景を表現していたのかについて、研究者の見解は様々である。たとえば、両神が争った理由について、アポロドロスとイソクラテスはアッティカの領有権をめぐるとするが^⑤、その他にも、都市の始祖となる権利^⑥、あるいは、都市を最初に築く権利をめぐる争いとする伝承もある^⑦。

アポロドロスの上記の引用も、文意は明快とはいえない。記述によれば、両神はmartyriaを出現させて、その後争いが起こったとされる。両神の争いが決着をみたのは、アテナがオリーブの木を植えたのが先であったと、ケクロプスが証言したためという。しかし、先に到着したのは、ポセイドンであったと書かれているから、アポロドロスは女神が詐術つまり賢さによって領有権を得たことを物語っていると思われる^⑧。またアポロドロスは、両神の争いにゼウスが介入したことを伝えている。エウリピデスの失われた悲劇『エレクトーイ』もまた、裁定者としてのゼウスについて語っていたとき

図1 「アテナとポセイドンのアッティカ土地争い」パルテノン神殿西破風(前438-432年頃)大英博物館

図2 「アテナとポセイドンのアッティカ土地争い」パルテノン神殿西破風(前438-432年頃) O. Palagia 1993による復元(M. Cox 作画)

れる⁹⁹⁾。以上が、両神の争いについて語る伝承の概要である。

パルテノン西破風の構図は、大まかに、中央と左右両側の三つの部分から成り立っている(図2)。中央6体の像の同定については、研究者間に同意が見られる。6体は、おそらく神々を表しており、左から、ニケ、ヘルメス、アテナ、ポセイドン、イリス、アンフィトリテとされる。残る破風の両角の人物像は、一般に、アッティカの英雄たち、つまりアテナイの太古の住民を表していたとされる。ただしその名前は研究者によって様々に想定されている。

破風には、左右対称に二台の戦車が表現されていたため、破風の構図は両神が *martyria* を生み出した場面だけではなく、両神による戦車競走もまた表していたとする意見もある。アポドロロスが示唆するように、アッティカにおいて崇拜を受けるべき神は、アクロポリスに先に到着した者とする伝承があるからである¹⁰⁰⁾。この意見によれば、破風は二柱の神々が競走の後に戦車から降車した場面を表していると解釈される¹⁰¹⁾。

西破風の解釈と復元については、美術作品も重要な役割を果たしている。特に重要なのは、サンクトペテルブルクとペラの二つのヒュドリアである¹⁰²⁾。後者の、

前400年頃のペラ出土のヒュドリアには、争う両神の間に巨大な雷霆が表されている(図3)。文献においても、ゼウスが雷を投げて介入したことが記されているため、多くの学者は破風にも雷霆が表現されていたと見なす¹⁰³⁾。因みに、破風中央に雷霆の復元を最初に提案したのはE. Simonによる1985年の論考で、彼女はペラのヒュドリアが発見される以前にこの復元案を提唱していた(図4)。

本稿においては、ゼウスの介入というモチーフに着目し、西破風の解釈について論じる。美術作品の中で、西破風は、アテナとポセイドンの争いというアッティカ地方神話を表した最古の作例であったと見なされている¹⁰⁴⁾。つまり、破風の構図を構想した者は、この主題を最初に表現したと思われる。構想にあたっては、ゼウスによる介入のモチーフを表す他の作例を参照したことが推測されるだろう。というのも、主神による調停の挿話は、より古い美術作品群においても表現されていたからである。これらの先行作例群と比較し、破風全体の解釈について検討した論考はこれまでの研究に存在しない。

ゼウスによる介入

パルテノン建造以前に、ゼウスによる介入は、アルカイック期の二つの主題において表現されていた。ヘラクレスとキュクノスの争いと、デルフォイの鼎をめぐるヘラクレスとアポロンの争いである¹⁰⁵⁾。

図3 「アテナとポセイドンのアッティカ土地争い」ヒュドリア(前400年頃) ペラ、考古博物館80/514。

図4 「アテナとポセイドンのアッティカ土地争い」パルテノン神殿西破風中央(前438-432年頃) E. Simon 1980による復元(M. Balestrazzi, Padua 作画)

ヘラクレスとキュクノスの争いは、前6世紀前半のアッティカ陶器画に登場する(図5)⁽¹⁶⁾。作例数は100を超えており、この非常に魅力的とはいえない平凡な神話物語は、陶器画主題としてはなぜか人気があったことが推測される⁽¹⁷⁾。文献は、息子ヘラクレスと孫キュクノスの闘争にゼウスが雷霆を投げて介入したことを伝える⁽¹⁸⁾。美術作例においては、争う二人の英雄の他に、ヘラクレスの守護女神アテナとキュクノスの父アレスがしばしば登場する。神々は、二人の英雄の背後に立つ様子で表されることが多いが、両神が加勢する様子も描かれ、アテナとアレスの直接対決を表す作例すらある⁽¹⁹⁾。ゼウスは、美術作品においては、39点において調停者

として登場している⁽²⁰⁾。片手ないし両手を上げて、大股で争いに割って入る場面が定型となっている。また、ゼウスの代わりに、雷霆のみが表現されることもある。ベルリンの画家によるローマの作例では、敗北したアレスの頭上に雷霆が現れており、二台の戦車表現と共に西破風の構図を連想させる。この主題の作例群がパルテノン神殿に影響した可能性を考えさせるだろう(図6)⁽²¹⁾。

鼎を巡るヘラクレスとアポロンの争いの主題は、最古の作例は前8世紀まで遡る。前6世紀後半以降の作例では、ゼウスが調停者として表現されることがある⁽²²⁾。代表例は、前525年頃に成立した、デルフォイ神域のシフノス人の宝庫東破風である(図7)⁽²³⁾。

図5 「ヘラクレスとキュクノスの戦い」黒像式ヒュドリア(前520年頃)ボストン美術館 63.473.

図6 「ヘラクレスとキュクノスの戦い」赤像式クラテル(前5世紀初頭)ローマ、ヴィラジュリア博物館 Vighi 99.

図7 「ヘラクレスとアポロンの争い」シフノス人の宝庫東破風(前525-500年頃)デルフォイ、考古博物館

戦車表現の意味

バルテノン西破風と二つの主題群の先行作例の比較検討によって、西破風解釈に関して寄与しうる二つの点が浮かび上がるように思われる。

一つめは、二柱の神々の背後に表された戦車表現の解釈についてである。上記のように、西破風は、martyriaの創出だけでなく、戦車競走の場面を表していたとする見解を複数の研究者が提出している。この地方神話を最も詳細に語るアポドロロスにおいては、両神は競走をしたとは書かれていないが、ポセイドンが先に到着したこと、それにもかかわらずアテナが先に martyrion を創出したと目撃者が証言し女神が支配権を得たことが語られている。アポドロロスだけでなく、342年のイソクラテスもまた、ポセイドンが先に到着したとする物語を伝える⁽²⁴⁾。このため、破風の戦車表現が、両神の競走を含意していたかどうか論争点のひとつとなってきた⁽²⁵⁾。この点について、最も詳細に論じる M. Meyer は、西破風に戦車競走が表現されていたとする説を退けて戦車は両神の一種のアトリビュートとして表されたにすぎないと見なす⁽²⁶⁾。

ゼウスの介入を表す先行作例と比較すると、Meyer 説が正鵠を射ているであろうことが推測される。ヘラクレスとキュクノスの争いを語る伝承においても、ヘラクレスとアポロンの争いを表す作例においても、一騎打ちをする英雄や神々の背後にはしばしば戦車が表現される。典型的な例は、シフノス人の宝庫東破風(図7)で、ちょうどホメロスの英雄たちのように、両神がこれらに乗って戦場に到着し降り立った場面が表されていたとされる⁽²⁷⁾。二つの主題を語る文献伝承において、戦車競走は言及されていないゆえ、戦車は定型表現に過ぎなかったとすべきだろう⁽²⁸⁾。西破風の戦車だけが、競走を表していたと解釈する必要はないと思われる。そもそも、数多い英雄ないし神々の一騎打ち場面には、一般に貴族階級を暗示するアトリビュートとして戦車がしばしば表現される。

女性と子供

ゼウスの介入に関する先行作例群と比較することで、破風について説明が容易になるもう一つの重要な点があるように思われる。すなわち、破風両角の、数多くの女性と子供たちである。左右計16の人物像の内訳は、女性7(C, D, F, Q, T, U, W)、子供4(E, P, R, S)、男性3(A, B, V)、不明2(A*, U*)である。女性が多いことも目につくが、とりわけ子供は、そもそも古典時代のアッティカ美術一般において好まれる表現とはいいがたい。その謎めいた特徴は、神話物語とも一致せず、解釈を阻む要

因として繰り返し指摘されてきた⁽²⁹⁾。

上述したように、破風両角の群像は、一般的には両神の争いを目撃ないし審判した、アッティカの神話上の地方英雄たちと解されてきた。2000年に発表された、Pollittによる論考は、女性たちについて説明を試みる代表的な論考である。Pollittは、女性たちが全て女神に投票することでアテナの勝利を導いたとする Varro に由来する文献を指摘し、女性像の存在を説明する。投票という行為を強調し、西破風を古典期アテナイの民主的な裁判のいわば原風景の描写と見なし、バルテノン建造当時のペリクレスによる施策を鑑賞者に連想させたいと記す⁽³⁰⁾。

しかし、女性が投票に参加したとする物語は、後代の孤立した伝承にすぎず、「フェミニストイデオロギーの最古の伝承の一つ」が、古典期神殿装飾のための文献上の典拠となったとは想定しにくいように思われる。加えて、多数の子供の表現は、この解釈によっては理解しがたいだろう。

しかし、ゼウスが争いを止めたというモチーフを重要視すれば、両角の家族群像の説明はより容易になるように思われる。というのも、父親神による調停は、争う両神の後裔の繁栄につながるからである。ヘラクレスとキュクノス、そして、ヘラクレスとアポロンの物語が示唆するように、ゼウスが介入する理由は、争う者たちが自身の兄弟、子供ないし孫(キュクノス)であったからである。ゼウスは、自身の血統に連ならない神々や英雄たちの諍いに調停を目的として介入することはない。つまり父親神の行動は、親族の流血を防ぐためであった。バルテノン西破風の両角の人物と中央場面は、これまで統一的に解釈されることはなかったが、ゼウスの介入という中央モチーフはいわば原因であり、結果としてもたらされる左右の太古のアテナイ人の群像と確かに関係していたと思われる。

神殿奉献者にもたらされる charis

破風両角の子供たちを含む家族群像は、両神の血筋が、将来子宝に恵まれることを示す表象であったと思われる。伝承によれば、ポセイドンはその子エレウシス王エウモルポスによって後裔を得、またアテナは、養い児エリクトニオスを通じて、アテナイ人という栄えるべき子孫を得た⁽³¹⁾。つまり、ゼウスの調停はアッティカ繁栄の基礎を築く行為であった。この解釈は、目撃者ないし証人という解釈と必ずしも両立しないわけではないが、従来の解釈には神殿を奉献した市民たちに対する神々からの恵み charis という文脈が欠けていたように思われる。解釈にあたっては、神と人との贈与の交換が、最も重要と思われる⁽³²⁾。神殿破風を見る者は、二つのメッ

セージを受け取ったのだろう。神々が、アテナイ人に繁栄をもたらしたこと、またアクロポリスに残る二つの *martyria* はその目に見える証拠であったことである。東破風は、女神の誕生を描き、一方、西破風は、アテナイ人を神々の直接の子孫として提示する意義を有していたと考えられる。

参考文献

- J. M. Barringer, *Art, Myth and Ritual in Classical Greece* (Cambridge 2008)
- E. Berger, *Parthenon-Studien. Zweiter Zwischenbericht*, *AntK* 20, 1977, 124–141.
- I. Beyer, *Die Zweigespanne und Mittelgruppen der Parthenongiebel*, *AM* 92, 1977, 101–116.
- J. Binder, *The West Pediment of the Parthenon: Poseidon*, in: A. L. Boegehold, ed., *Studies Presented to Sterling Dow* (Durham 1984) 15–22.
- F. Brommer, *Die Skulpturen der Parthenon-Giebel: Katalog und Untersuchung* (Mainz 1963)
- D. Castriota, *Myth, Ethos, and Actuality. Official Art in Fifth Century B.C. Athens* (Madison 1992)
- S. Drougou, *Krieg und Frieden im Athen des späten 5. Jhs. v. Chr. Die rotfigurige Hydria aus Pella*, *AM* 115, 2000, 147–216.
- Ch. Ellinghaus, *Die Parthenonskulpturen. Der Bauschmuck eines öffentlichen Monumentes der demokratischen Gesellschaft Athens zur Zeit des Perikles. Techniken in der bildenden Kunst zur Tradierung von Aussagen*, *ANTIQUITATES. Archäologische Forschungsergebnisse* 52 (Hamburg 2011)
- B. Fehr, *Becoming Good Democrats and Wives. Civic Education and Female Socialization on the Parthenon Frieze, Hephaistos Sonderband* (Zürich 2011)
- E. B. Harrison, *Eumolpos Arrives in Eleusis*, *Hesperia* 69, 2000, 267–291.
- E. B. Harrison, *U and Her Neighbors in the West Pediment of the Parthenon*, in: R. Wittkower - D. Fraser - H. Hibbard - M. J. Lewine, eds., *Essays in the History of Art Presented to Rudolf Wittkower* (London 1967) pp. 1–9.
- J. Hurwit, *The Athenian Acropolis: History, Mythology, and Archaeology from the Neolithic Era to the Present* (Cambridge 1999)
- R. Janko, *The Shield of Heracles and the Legend of Cynus*, *CIQ* 36, 1986, 38–59.
- C. Jubier-Galinier, *Athéna et Poséidon en conflit: adaptations céramiques à l'ombre de l'Acropole*, in: H. Ménard - P. Sauzeau - J.-F. Thomas, eds., *La pomme d'Eris. Le conflit et sa représentation dans l'antiquité* (Montpellier 2012) 273–294.
- K. Junker - S. Strohwald, *Götter Als Erfinder. Die Entstehung der Kultur in der Griechischen Kunst. Zaberns Bildbände zur Archäologie. Sonderbände der Antike Welt* (Mainz 2012)
- C. M. Keesling, *Early Greek Portraiture. Monuments and Histories* (Cambridge 2017)
- B. Kreuzer, *»Geschlossene Gesellschaft« im Parthenon-Westgiebel*, in: Th. Ganschow und M. Steinhart, eds., *Otium. Festschrift für Volker Michael Strocka* (Remshalden 2005) 193–200.
- P. A. Marx, *Athens NM Acropolis 923 and the Contest between Athena and Poseidon for the Land of Attica*, *Antike Kunst* 54, 2011, 21–40.
- M. Meyer, *To Cheat or not to Cheat: Poseidon's Eris with Athena in the West Pediment of the Parthenon*, *Electra* 4, 2018, 51–77.
- M. Meyer, *Contexts of contest: Athena, Poseidon and the Martyria in the west pediment of the Parthenon*, D. R. Pérez, ed., *Greek Art in Context. Archaeological and Art Historical Perspectives* (Oxford 2017) 119–131. (Meyer 2017a)
- M. Meyer, *The martyria of the Strife for Attica – martyria of Changes in Cult and Myth. Space and Time in the West Pediment of the Parthenon*, in: A. Bierl – M. Christopoulos – A. Papachrysostomou, eds., *Time and Space in Ancient Myth, Religion and Culture. Mythos Eikon Poiesis* 10 (Berlin 2017) 181–196. (Meyer 2017b)
- M. Meyer, *Athena, Göttin von Athen. Kult und Mythos auf der Akropolis bis in klassische Zeit. Wiener Forschungen zur Archäologie* 16 (Wien 2017) (Meyer 2017c)
- I. Mitsonis, *New Identifications of Heroes and Heroines on the West Pediment of the Parthenon: The Case of P, Q*, in: R. Morais – D. Leão – D. R. Pérez (eds.), *Greek Art in Motion. Studies in honour of Sir John Boardman on the occasion of his 90th birthday* (Oxford; Archaeopress Publishing Ltd 2019) 480–488.
- J. Neils, *Salpinx, Snake, and Salamis. The Political Geography of the Pella Hydria*, *Hesperia* 82, 2013, 595–613.
- R. Osborne, *Democracy and Imperialism in the Panathenaic Procession: The Parthenon Frieze in Its Context*, in: W. D. E. Coulson – O. Palagia – T. L. Shear, Jr. – H. A. Shapiro – F. J. Frost (eds.), *The Archaeology of Athens and Attica under the Democracy. Proceedings of an International Conference Celebrating 2500 Years since the Birth of Democracy in Greece, Held at the American School of Classical Studies at Athens, December 4–6, 1992* (Oxford 1994) 143–150.
- J. M. Padgett, *The Berlin Painter. As We Knew Him*, in: J. M. Padgett, *The Berlin Painter and His World. Athenian Vase-Painting in the Early Fifth Century B. C.* (New Heaven and London 2017) 41–65.
- O. Palagia, *Fire from Heaven: Pediments and Akroteria of the Parthenon*, in: J. Neils, ed., *The Parthenon. From Antiquity to the Present* (Cambridge 2005) 225–259.
- O. Palagia, *The pediments of the Parthenon* (Leiden 1993)
- J. J. Pollitt, *Patriotism and the West Pediment of the Parthenon*, in:

- G. Tsetskhladze, A. Prag, and A. Snodgrass, eds., *Periplus: Papers on Classical Art and Archaeology Presented to Sir John Boardman* (London and New York 2000) 220–26.
- V. Räuchle, *Die Mütter Athens und ihre Kinder: Verhaltens- und Gefühlsideale in klassischer Zeit* (Berlin 2017)
- B. S. Ridgway, *Fifth Century Styles in Greek Sculpture* (Princeton 1981)
- B. S. Ridgway, *The East Pediment of the Siphnian Treasury: A Reinterpretation*, *AJA* 69, 1965, 1–5.
- C. Robert, *Der Streit der Götter um Athen*, *Hermes* 16, 1881, 60–87.
- P. Schultz, *The Iconography of the Athenian Apobates Race: Origins, Meanings, Transformations*, in: O. Palagia and A. Choremi-Spetsieri eds., *The Panathenaic Games* (Oxford 2007) 59–72.
- K. A. Schwab, *Review of O. Palagia, The Pediments of the Parthenon*. *Monumenta Graeca and Romana* 7 (Leiden 1993), *AJA* 99, 1995, 162–163.
- H. A. Shapiro, *Herakles and Kyknos*, *AJA* 88, 1984, 523–529.
- J. L. Shear, *Polis and Panathenaia. The History and Development of Athena's Festival* (Diss. University of Pennsylvania, Philadelphia 2001)
- T. L. Shear, Jr., *Trophies of Victory: Public Building in Periklean Athens* (Princeton 2016)
- E. Simon, *Poseidon in Ancient Greek Religion, Myth, and Art*, in: S. D. Pevnick, ed., *Poseidon and the Sea. Myth, Cult and Daily Life*. (Exhibition catalogue Tampa). Tampa: Tampa Museum of Art (London 2014)
- E. Simon, *Die Götter der Griechen* (München 1985) 2. edition.
- E. Simon, *Die Mittelgruppe im Westgiebel des Parthenon*, in: H. A. Cahn, E. Simon, eds., *Tainia. Festschrift für Roland Hampe* (Mainz 1980) 239–255.
- B. S. Spaeth, *Athenians and Eleusinians in the west pediment of the Parthenon*, *Hesperia* 60, 1991, 331–362.
- A. Stewart, *Greek Sculpture. An Exploration* (New Haven 1990)
- M. Tiverios, *Der Streit um das attische Land. Götter, Heroen und die historische Wirklichkeit*, in: V. M. Strocka, ed., *Meisterwerke. Internationales Symposium anlässlich des 150. Geburtstags von A. Furtwängler*. Freiburg im Breisgau 30. Juni-3. Juli 2003 (München 2005) 299–319.
- L. Weidauer – I. Krauskopf, *Urkönige in Athen und Eleusis. Neues zur 'Kekrops'-Gruppe des Parthenonwestgiebels*, *JdI* 107, 1992, 1–16.

挿図典拠

- 図1 著者撮影
 図2 Palagia 1993, fig. 22.
 図3 Simon 1980, fig. 1.
 図4 Drougou 2000, colpl. 1.

- 図5 LIMC VII (1994) no. 57 s. v. Kyknos I (A. Cambitoglou – S. Paspalas).
 図6 LIMC VII (1994) no. 118 s. v. Kyknos I (A. Cambitoglou – S. Paspalas).
 図7 著者撮影

註

- ※ 古代ギリシアローマ文献の略号はDNP I (1996) XXXIX–XLVII; Liddell – Scott – Jones XVI–XXXVIIIによる。専門誌、辞典その他の略号はDeutsches Archäologisches Institutの定める方式に従う。Liste der abkürzenden Zeitschriften, Reihen, Lexika und häufig zitierten Werke <<https://www.dainst.org/publikationen/publizieren-beim-dai/richtlinien>> (6.11.2020)
- (1) パルテノン神殿東西破風彫刻と断片は、大英博物館と新アクロポリス博物館他に収蔵されている。Paus. 1.24.5.
- (2) Brommer 1963, 41, 96-97, 164, no. 4, pls. 102, 152; Beyer 1977, 115-116; Berger 1977, 128; Simon 1980, 249-255; Palagia 2005, 246; Meyer 2017c, 400 n. 3196; Meyer 2018, n. 46.
- (3) Hdt. 8.55 は、アクロポリスのエレクテイオンに残された二つの遺物 *martyria* を目撃している。
- (4) 争いに関する古文獻のリストについては右記を参照。Simon 1980, 239-245; Palagia 1993, 52 n. 1; Pollitt 2000, 222-226; Tiverios 2005, 300-303, 315 n. 8, 30, 110; Meyer, 2017c, 407-415 n. 3229-3283; Meyer 2018, 62 n. 63. 文献におけるこの争いの最も古い言及はHdt. 8.55である。
- (5) Apollod. 3.14.1; Isokr. or. 12. 193 (panathen.).
- (6) Varro de gente p. R. fr 17 (fr. 222 ed. Salvatore 1999) apud Aug. civ. 18.9; Ov. met. 6.71; Aristeid. 1.43 (panathen., ed. Lenz & Behr); Him. or. 6.7. Meyer 2017c, 407, 409-412 n. 3232, 3255, 3264, 3267; Meyer 2018, 62-63 も参照。
- (7) Hygin. fab. 164.
- (8) Palagia 2005, 243. Simon 1980, 242-243; Meyer 2018, 53 も参照。
- (9) ただし、誰が両神の争いの審判となり、誰が証人ないし目撃者となったかについて文献の記述は一致していない。Meyer 2018, 67 n. 82は、パルテノン西破風のゼウス介入のモチーフがエウリピデスに影響を与えたと見なす。前4世紀以降の文献においては、ゼウスではなくケクロプスが審判を行ったとされることがある。Xen. mem. 3.5.10; Callim. iamb. 4.67-69; cf. Nonn. Dion. 36.126を参照。ただし、アポロドロスのように、ケクロプスを審判ではなく目撃者とする場合もある。Hyg. fab. 164はゼウスを審判とする。その他の審判者に関する伝承は右記のとおり。ゼウスと12神 (Callim. Hec. F 260, 24-26; Hollis [2009] F 70, 9-11)、ゼウスが12神を審判に指名したとする例 (Apollod. 3.14.1; Ov. met. 6.70-82)、逸名の審判者たち (Plut. Them. 19.3)、アテナイ人 (Xen. mem. 3.5.10; Aristeid. 1.41-43 (panathen., ed. Lenz & Behr); Him. or. 6.7; Varro [註6を参照])。

- (10) アポロドロスその他の文献によれば、アッティカの所有権は最初にアクロポリスに到着した神に与えられたという。Apollod. 3,177-179; Isokr. or. 12. 193 (panathen.); Hygin. fab. 164; sch. Aristeid. 1.40 (panathen., ed. Lenz & Behr). これらのうち、アポロドロスとイソクラテスはポセイドンが最初に到着したとする。Meyer 2017a, 127; Meyer 2017b, 191-192; Meyer 2017c, 408; Meyer 2018, 67.
- (11) Shear 2016, 115-117; Schultz 2007, 66-69; Palagia 2005, 243-253; Shear 2001, 735-738; Palagia 1993, 40; Stewart 1990, 153-154; Binder 1984.
- (12) (1) St. Petersburg, Hermitage P 1972.130: Tiverios 2005, 301-302, 307, 312, 316, 319, fig. 11; Marx, 2011, 33-36, pl. 6,1-2; Jubier-Galinier 2012, 275-281, fig. 2; Meyer 2017a, 124 n. 19, fig. 8.5; Meyer 2017c, 404-406 (bibliography), fig. 381-383; Meyer 2017b, 184-185; Meyer 2018, 62. (2) Pella, Arch. Mus. 80/514: Meyer 2018, n. 58; Meyer 2017a, 124 n. 16, fig. 8.4; Meyer 2017b, n. 9; Meyer 2017c, 399, 402-403, 406 (bibliography) figs. 384-392; Tiverios 2005, 299-319, figs. 1-10; Simon 2014, 47, fig. 17; Neils 2013, 595-613, figs. 1-9; Drougou 2000, 147-216, pls. 30-39, colorpls. I-IV.
- (13) Palagia 2005, 244; Junker – Strohwald 2012, 76; Kreuzer 2005, 197; Drougou 2000, 200-201; Schwab 1995, 163; Palagia 1993, 44; Weidauer – Krauskopf 1992, 7; Simon 1985, 211; Simon 1980. 右記も参照。Meyer 2018, n. 82; Meyer 2017a, 123; Meyer 2017b, 184; Meyer 2017c, 300; Barringer 2008, 66-67.
- (14) Marx 2011, 37 は、アルカイック時代の二つの陶器画作例が両神の争いに関わる神話を表現していたと見なす: (1) パナテナイア・アンフォラ。Athens, National Archaeological Museum Acr. 923: Marx 2011, pls. 3, 1-3; 4, 1. (2) 黒像式ピュクシス。Brussels, Royal Museums of Art and History A 2989: Marx 2011, pl. 6, 3-4.
- (15) Robert 1881, 82; Meyer 2017c, 402 n. 3192; Castriota 1992, 147 が指摘するように、ゼウスの介入はお使いの神々ヘルメスないしイリスによって構図中に示されることがある。なおゼウスの介入を表す主題として、もうひとつ、作例数は少ないがマルペッサをめぐるアポロンとイダスの争いがある。Simon 1980, 245; LIMC VI (1992) 364-366 s. v. Marpessa (L. J. Roccas).
- (16) 黒像式ヒュドリア (前 520 年頃)。Boston, Mus. of Fine Arts 63.473: Para 164, 31bis; CVA 2, pl. 3882 (916), 3; LIMC VII (1994) 975, no. 57 s. v. Kyknos I (A. Cambitoglou – S. Paspalas).
- (17) Shapiro 1984, 523.
- (18) ゼウスの介入については二つの文献が語る。Apollod. 2, 5, 11; Hyg. fab. 31, 3; Shapiro 1984, 526-527; LIMC VII (1994) 971 s. v. Kyknos I (A. Cambitoglou – S. Paspalas).
- (19) 黒像式クラテル (前 540-530 年頃)。London BM B364: ABV 229, VI; LIMC VII (1994) 976, no. 72 s. v. Kyknos I (A. Cambitoglou – S. Paspalas).
- (20) ヘラクレスとキュクノスの争いの主題は、9つの図像類型に分類される。LIMC VII (1994) 970-991 s. v. Kyknos I (A. Cambitoglou – S. Paspalas). ゼウスないし雷霆は、タイプ C, D, G に表現されている。Shapiro 1984. esp. 526-527 は、陶器画上のゼウスの介入のモチーフは、もともとヘラクレスとキュクノスの争いの調停として描写されたのではないとする (なぜならキュクノスは戦死するから)。このモチーフは、キュクノス殺害後のヘラクレスとアレスの争いの調停として表現され、類型化した後に、ヘラクレスとキュクノスの戦いにも用いられたとシャピロは見なす。Janko 1986, esp. 55-56 も参照。
- (21) 赤像式クラテル (前 5 世紀初頭)。Roma, Villa Giulia, Vighi 99: ARV² 206, 131; CVA 4, pl. 14 (2881), 1; 15 (1882), 1-2; Shapiro 1984, n. 28; Padgett, 2017, 52, pl. on p. 84; LIMC VII (1994) 978, no. 118 s. v. Kyknos I (A. Cambitoglou – S. Paspalas).
- (22) LIMC V (1990) 133 s. v. Herakles (S. Woodford). 仲介者として、ゼウス (nos. 3021, 3022, 3026) だけでなくヘルメス (nos. 3020, 3023) やアテナ (nos. 3019, 3024, 3025) も登場する。文献では Apollod. 2, 6, 2 が記述を残す。
- (23) Delphi, Arch. Mus.: FDelphes IV 2, 153ff.; Ridgway 1965, 1-5, pls. 1-2; LIMC V (1990) 138, no. 3026, pl. 132 s. v. Herakles (S. Woodford).
- (24) 註10を参照。なお Sch. Aristeid. 1.40 (panathen., ed. Lenz & Behr) は、アクロポリスに先に到着した神ではなく、奇跡の martyrion を先に産出した神が勝者となるとする物語を伝える。
- (25) 競走説の代表として Binder 1984 を挙げる。
- (26) Meyer 2017b, esp. 185; Meyer 2017c, 401; Meyer 2018, esp. 66-67. Ellinghaus 2011, 138 も参照。
- (27) ヘラクレスとキュクノスの戦いに関しても、前 591-570 年に成立したとされる『ヘラクレスの盾』(Hes. Sc. 370-373) に、二人の英雄が降車して戦闘をするという順序が描写されている (Janko 1986, 38-48)。戦車の表現については、LIMC V (1990) 142, nos. 3026, 3034, 3027 s. v. Herakles (S. Woodford); Shapiro 1984, 525 も参照。ちなみに、ヘラクレスとキュクノスの戦いに関して、Janko 1986, 51-55 は、両英雄が戦車競走をしたという古いヴァージョンが存在した可能性を想定する。文献伝承には、戦車競走の記述は見られないが、ヘラクレスが神馬 Arion に騎乗してキュクノスを殺したとする伝承が存在するためである (T-Schol. Hom. Il. 23, 347; D-Schol. Hom. Il. 23, 346)。LIMC VII (1994) 970-971 s. v. Kyknos I (A. Cambitoglou – S. Paspalas) も参照。
- (28) 註 19 に挙げた、大英博物館の作例においては、戦車を走らせるヘラクレスとキュクノスが表されている。ただし LIMC VII (1994) 976, no. 72 s. v. Kyknos I (A. Cambitoglou – S. Paspalas) は、この場面を競走ではなく逃亡と追跡の描写と見なす。
- (29) Mitsonis 2019, esp. 482-483; Räuchle 2017, 254; Meyer 2017a,

59; Meyer 2017b, 184; Meyer 2017c, 401; Junker—Strohwalld 2012, 75; Fehr 2011, 136; Barringer 2008, 66 n. 9; Palagia 2005, 244; Kreuzer 2005, 196-170; Shear 2001, 738; Pollitt 2000, 224; Hurwit 1999, 176; Palagia 1993, 40; Osborne 1994, 144; Castriota 1992, 148; Spaeth 1991, 338; Ridgway 1981, 46. Keesling 2017, 176. も参照。

(30) Aug. civ. 18.9; Pollitt 2000, 224-225.

(31) 前5世紀前半のアテナイにおけるエリクトニオス神話の生成に関する研究史については LIMC IV (1988) esp. 927 s. v. Erechtheus (U. Kron); Meyer 2017c, esp. 361-452 を参照。エリクトニオス神話によって、アテナイ人は彼らが女神の後裔であったとする物語を確立し、視覚的にもエリクトニオス神話を繰り返し表現したとされる。

(32) 以上の考察が正しいとすれば、西破風の個々の像の同定に関して、大まかに二つの方向が考えられるだろう。一つめは、向かって左側にアテナの養い子アテナイ人の家系を認め、右側にポセイドンに連なるエレウシス人の家系を認める解釈である。1991年に提唱された、B. S. Spaeth 1991の論考がこれに該当し、左にエレクテウス王家、右にエウモルポス王家の表現を見てとる。Spaeth は、たとえば、筋

肉質の力強いトルソ V をエウモルポスと見なす。Brommer 1963, 55, pls. 127, 128; Harrison 1967, 9 n. 55; Harrison 2000, 280-281, 285 も参照。LIMC IV (1988) 56 (no. 2), 59 s. v. Eumolpos (L. Weidauer) は、V ではなく T (母 Chione) の膝上の少年 S をエウモルポスと見なす。Meyer 2017c, n. 3199; Palagia, 2005, n. 111 も参照。二つめの解釈は、エレウシス王家とエレクテウス王家を対照させるのではなく、左右二つの群像を全てアテナイ王家の家族の表現とする同定である。現存する彫像には、エウモルポスやエレクテウスを考えさせるような武具をまとう戦士像(たとえばペラのヒュドリアに見られるような)は認められないゆえ、エウモルポスは西破風に表現されていなかったことも考えられる。つまり、破風全体が、アテナイの太古の王家、つまりケクロプスとその家族の表現であったとする解釈が考えられる。

※ この論文は文部科学省科学研究費 Parthenon Project Japan 2018-2021 (Grant Number JP18H03566) による研究成果の一部である。

(おさだ としひろ)